令和２年度外部評価委員会議事録

徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター

１．日時

令和３年３月１８日（木）１４：００～１５：３０

２．場所

第１教室（自治研修センター内）

３．出席者

外部評価委員会委員

荒木委員長、友滝副委員長、喜多條委員、中西委員

政策研究センター職員

竹岡所長、板東副所長、岸本研究員

関係部署職員

南部課長補佐、岩本主事（南部総合県民局地域創生防災部）

髙木課長補佐、平野主事（西部総合県民局農林水産部）

細木講師（徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野）

坂本准教授（鳴門教育大学自然・生活系教科実践高度化コース）

中川教授（徳島文理大学人間生活学部食物栄養学科）

多田講師（阿南工業高等専門学校創造技術工学科建設コース）

４．委員会実施概要

開会挨拶　竹岡所長

評価基準、評価結果の取扱いについて

令和２年度調査研究報告及び質疑応答

令和３年度調査研究テーマについての助言・提言

５．議事概要

議事１「評価基準、評価結果の取扱いについて」

(1) 必要性、(2) 先駆性、(3) 適正性、(4)実用性、(5)発展性の５つの視点ごとに各委員が、「5 非常に優れている、4 優れている、3 普通、2 あまり評価できない、1 評価できない」の５段階評価で採点を行い、委員全員の採点結果の小計と全評価項目の合計、併せて委員からの所見の代表的なものを公表することについて、各委員から了解を得た。

議事２「令和２年度調査研究報告及び質疑応答」

（１）消費者教育が地域を変える！～地域課題は次の世代を育てる学びの宝箱～に関する質疑応答

○A委員：レシピとしてカレーを選んだ理由と、大学生の食生活の調査方法について、県内の大学に絞らずインターネットによる調査とした理由について、教えてほしい。

○E研究員：カレーを選んだ理由は、もともと牟岐町で、カレーを通じて食育を推進していきたいという要望があり、併せて地産地消を推進する上で、誰もが簡単に実践できるものを題材にしたほうがいいかと考えたため。また、大学生の食事に関する実態調査を全国を対象にインターネットによる調査としたのは、コロナ禍の中で、都市部と地方の双方の学生の傾向を知りたいと考えたためである。

○A委員：カレーにするなら、地域に限定したほうがよかったのではないか。例えば海老めしとか、そういうものは浮かばなかったのかなという疑問と、牟岐町含め「きゅうりタウン構想」を進めているので、きゅうりが入っていないのは疑問に感じた。

○E研究員：おっしゃるように、徳島県の地域性を生かした食材が他にもあるので、今後、そのようなものを題材に、地域に根差した調査研究をしていきたい。

○B委員：コロナ禍の中、小学校向けにどのように広報したのか。また、参加した子どもたちに傾向はあるか。

○E研究員：牟岐町の小学校の校長先生に参加を依頼した。アプリを使うので、あまりに低学年だと難しいだろうと考え、高学年に絞って、興味のある子を集めさせていただいた。

○B委員：食材カレンダーやレシピは、今後の活用法が具体的に決まっているか。

○E研究員：県民局が連携活動を実施している四国大学や徳島文理大学の学生に対して周知し、活用を促進したいと考えている。

○B委員：簡単に手早くできそうなレシピなので、一人生活している学生とかはいいのかなと思った。また、食材の旬の時期を知らない人も多いと思うので、カレンダーを見ると一目瞭然に分かっていいのかなと思う。公共施設等に掲示して広報すれば、この時期これを食べたいなという形で、食生活に潤いが出るではないか。

○C委員：カレンダーは、旬のものがいつ使われるのかが分かって面白い。また、表紙のシイタケを使ったウェルかめのカレーが非常にかわいらしく、カレーによる牟岐町の食育活動が盛り上がることを期待している。また、クレジットカードをプログラミングするとは、具体的にはどんな作業なのか。

○E研究員：カードの読み込みや購入という作業を、ブロックを使って表現するアプリがあり、ブロックを順番に並べることで、小学生でも簡単に体験ができる。

○C委員：キャッシュレスだとお金を払った実感が薄くて怖いというのは大人でも大事な話だと思うが、子どものうちから身につけるのは非常にいいことだと思った。

（２）にし阿波エシカル未来創造キャンパスに関する質疑応答

○Ａ委員：外部からのサポートというのは、具体的にどのようなことか。

○Ｆ研究員：今後、傾斜地農耕システムの認知を深めることによって、地域外の人に来ていただき、その目線から発信してもらえることが、一つのサポートになるもの考える。

○Ａ委員：高校生から、課外授業の提案があったとのことだが、今後反映するのか。

○Ｆ研究員：授業という形になるか分からないが、２年間にわたり実施した調査研究の手法や成果を伝える機会が作れたらよいと考えている。

○Ｃ委員：この調査研究の目的は、地域農業の価値を洗い出して地域に還元する方法を見つけることだと思うが、具体的にはどういうことか。

○Ｆ研究員：地域の人と共に農業体験した高校生から、傾斜地農耕システムを後世に残していかねばならないという意見を多くいただいた。来年度以降も、出前授業等を通して、若い力をどんどん地域内へ還元していければと考えている。

○Ｂ委員：ワークショップに参加した高校生は、普段からエシカルに詳しかったり興味があったりする生徒たちなのか。

○Ｆ研究員：サークルを通してエシカル活動を行っていたり、高校全体で世界農業遺産関係のものをやっていたり、それぞれの高校による。

○Ｂ委員：にし阿波地域のエシカル文化やレジリアンスの高さが、すごく面白い。また、藤の里工房に関する聞き取りが詳しく、一度行ってみたいと思った。今後は上手く発信できる方法を考えてほしい。

（３）市販アクセサリーの品質調査による安全対策の必要性の検討に関する質疑応答

○Ｃ委員：早くＥＵと同じような法整備ができたらと期待している。徳島に新未来創造戦略本部ができた好機をとらえ、消費者庁と連携し、アレルギーの恐ろしさや自主規制の取組みが周知されることを期待している。着々と進んでいるようなので、今後も意義ある目的に向けて取り組んでいただければと思う。

○Ａ委員：私も強く期待しているのだが、業界への働きかけはどう考えているのか。

○Ｇ研究員：今、日本ジュエリー協会とはコンタクトが取れるようになっている。ただ、消費者庁と経産省と厚労省の狭間にあり、法規制は難しい。そこでJIS規格でジュエリー協会と組めたらいいなという話になっている。

（４）衣料品ロス削減を目的とした消費者教育に関する研究に関する質疑応答

○Ｂ委員：そうだなと思うことが多々あった。季節ごとに洋服を出し、同じ種類同じ色のものは除外する等、自分でできる手法たくさんあると思った。また、カラー

コーディネーターのアドバイスが加われば、余分なものを買わなくなるのではないかと思う。

○D委員：対象とした3名はどのように絞り込んだのか。また、各自ご家族がおられると思うが、家族の服も整理をしたのか。効果はあったのか。

○H研究員：調査対象者を選ぶのはこの研究の最大の難関だった。自分の家に研究者が来て全部の服を出し、しかも写真撮影まではとてもできない、という方が多いので、今回はお片付けの専門家のお知り合いの方を対象とした。家族の洋服まではとても手に負えないので、本人の洋服だけということで実施した。

（5）食品表示法で義務付けられている一般的な加工食品への栄養成分表示を推進するための環境整備に関する質疑応答

○C委員：今年度は新型コロナウイルスの影響で、内食化が進み、巣ごもり需要ということで、スーパーマーケットは割とどこも好調だったと思う。今回の調査結果を、これから先どのように繋げていくのか。

○I研究員：徳島県は消費者教育に非常に力を入れているので、栄養成分表示に対する需要は、どんとん高まっていくと思う。免責されている食品製造業者も、これからは表示をしていく方向に向かっていくだろう。コロナが落ち着き、保健所の監視が本格化した時に、業者からの相談が増えてくると思うので、大学としてできだけ協力していきたい。

○A委員：研修会の反応はどうか。

○I研究員：今まで参加していなかった業者の方が来られたので、非常に有意義な研修であったと思う。また、コロナの影響でZoomでの開催となったが、参加しやすかったと回答を得ている。

○K研究員：徳島県の取組について紹介させていただく。改正食品表示法が2020年4月1日から全面施行ということで、昨年度は、県内7つの地域において、食品表示制度講習会を開催し、432名の食品関係の事業者に説明や指導を行わせていただいた。令和2年度、いよいよ施行が始まったということで、ますます力を入れていきたいと考えていたところ、新型コロナウイルス感染拡大に直面し、講習会が開催できなかった。そこで、徳島県の「安心とくしま」ホームページ内に「食の安全安心情報ポータルサイト」を設け、栄養成分表示に関する動画を多数掲載し啓発をはかっている。これを見ていただくと、制度の概要やポイントが分かるようになっている。また、食品表示の表示例やQ＆Aなども載せて、ご当地食品表示例なども今年新たに作った。例えば、焼きちくわや乾燥ヒジキの表示内容など、非常に細かで具体的なものを載せている。コロナ禍にあり、

対面での指導や説明はできなかったが、できる限りのことをやらせていただと感じている。

（６）とくしま発！住まいのエシカル消費行動カード・ものさしの社会実装（認証ラベル化）事業に関する質疑応答

○Ｃ委員：非常に面白く分かりやすい。また、収入の属性案が提示されており、実践的でもある。調査研究の結果、消費者が優先しているもの、後回しにしているもの等、傾向はあるか。

○Ｊ研究員：カードは１から３段階となっていて、１が土地を探す段階、２が実際に設計をしていく段階で、３が施工にあたるメンテナンスしていく段階である。なので、家を建てる前に１から３の各段階を全部体験できるのがポイント。だいたいの方が、１と２の段階で住宅ローンでお金を使ってしまい、３のメンテナンス段階ではお金がなくなっていた。実は、３の段階にとても重要なものを入れている。大工の賃金は、国は今、１日あたり２万千円を指定しているが、徳島県内は１万５千円である。その差額分×６０日間人分をお支払いいただくことによって、SDGsの項目が上がるという仕組みを入れた。このほか、工務店はBCPに取り組むお金を入れた。この狙いは、災害の時に家が助かるかもしれないとか、家族が助かるかもしれないとか、そういった「売り難い」ものをわざと入れている。これは、工務店側にしてみれば、売るための訓練である。工務店は一般管理費の中で入れているが、施主から一般管理費とは何か、と問われる場合があるので、それはとても大切な経費なのだということを説明するきっかけにしたい。

○Ｂ委員：このカードゲームは、時間がかかると思うのだが、施主に２時間半や３時間かける時間があるのだろうか。内容を省略化して、短時間でできるコースはあるのか。

○Ｊ研究員：カードゲームには２種類あり、例えば、多くの方を集めて普通のゲーム形式で行うのが一般的なやり方で、これだと２時間半くらいかかる。実際、施主との打ち合わせ時には、そんな余裕はないので１５分版のコースを作っている。このほか、工務店同士の２社対決というゲームも現在作っており、１５分間、３０秒ずつ交互にカードを切っていき、どちらのカードが採用されるかを競う。このように、短い時間で、少しでも家を建てる時にSDGsに繋がればいいという視点で、フルスペック以外のものを来年度に多く作っていきたい。

○Ｂ委員：ファシリテーターのスキルによって上手く進むこともあると思うが、ファシリテーターは何人くらいるのか。

○Ｊ研究員：今は３名いる。現在、ファシリテーター研修資料を作成しており、ファシリテーターを育成するビジネスモデルを考えている。

○Ａ委員：とても面白い取り組みだ。今までの家造りと言ったら、値段や場所ばかりが気になって、細かいシミュレーションをしていなかった。施主側は、どれだけ値切って安く作るかという表層的なイメージがあって、なかなか一緒に良い家を作ろうという認識が少なかったのかなと思う。

○Ｊ研究員：ゲームの価値が下がってしまうので詳しくは言えないが、ゲーム時間が２時間半も掛かるのはゲームがメインではなく、ゲームをした後に３０分程度の学び直しの時間があり、気づきを与える機会を設けているからである。

議事３「令和３年度調査研究テーマについての助言・提言」

○Ａ委員：調査研究には、新規も継続もあり、継続には２年目３年目というのもある。調査研究を評価する者からすれば、１年目の内容と２、３年目の内容を同じ基準で測っていいものかどうか迷うところ。本来は、評価基準は２年目３年目になったら変わるべきだろう。今回は構わないが、来年度見直しをお願いしたいが、事務局はどうか。

○Ｋ研究員：おっしゃる通り、新規のテーマであれば、今回提示させていただいた評価方法で十分評価していただけるかと思うが、２年目３年目にかかっている調査研究は、より必要性が高まっているものもあれば、相変わらずというようなものもあろうかと思う。新規も継続も、同じ基準で評価しても良いのかという点も含めて、来年度検討させていただきたい。

令和2年度　徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター
外部評価委員会　評価結果一覧表

番号	調査研究名	(1)必要性	(2)先駆性	(3)適正性	(4)実用性	(5)発展性	合　計
1	消費者教育が地域を変える！～地域課題は次の世代を育てる学びの宝箱～	21	19	20	20	21	101
2	にし阿波エシカル未来創造キャンパス	22	18	19	19	20	98
3	市販アクセサリーの品質調査による安全対策の必要性の検討	23	22	20	22	22	109
4	衣料品ロス削減を目的とした消費者教育に関する研究	20	20	19	20	21	100
5	食品表示法で義務付けられている一般的な加工食品への栄養成分表示を推進するための環境整備	20	19	21	19	17	96
6	とくしま発！住まいのエシカル消費行動カード・ものさしの社会実装（認証ラベル化）事業	22	24	21	19	23	109

※１　評価項目の視点について

（１）必要性

今，実施すべき必要性（ニーズや社会的要請）があるものか。また、地域課題，地域再生等の課題解決を適切に踏まえた内容となっているか。

（２）先駆性

創造性や先進性はあるか。

（３）適正性

手段やアプローチ方法が妥当か。

（４）実用性

政策立案，政策提言，課題解決に寄与するものか。

（５）発展性

新しい知見や価値観が得られるものか。また、波及効果があるものか。

※２　評価基準と評価結果の公表について

（１）～（５）の視点ごとに各委員（５名）が５段階評価「5非常に優れている，4優れている，3普通，2あまり評価できない，1評価できない」で採点を行い，（１）～（５）ごとの委員全員の評価結果の小計，全評価項目の合計，併せて，各委員の所見について代表的なものを公表する。

令和2年度　徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター　外部評価委員会　所見一覧表

番号	調査研究名	所　　見
1	消費者教育が地域を変える！～地域課題は次の世代を育てる学びの宝箱～	・小学校で必須となったプログラミング教育については、参加した子どもから、キャッシュレス決済の便利さと同時に、お金を払った感覚が薄れる不安や怖さも感じることができたとの感想があり、金融教育としては有意義。牟岐の美味しい食材カレンダーも、地元ならではの多彩な農作物の旬な時期がビジュアルに分かり、是非さまざまなところで配布・ダウンロードできるように活用して欲しい。 ・次世代への消費者教育を多彩な切り口で調査研究しており、興味深い。資料やチラシ、カレンダーも分かりやすく、よくまとまっている。ただ県南カレーは疑問。県南らしい料理は他にあったのでは。 ・コロナ禍で活動は大変な苦労があったかと思うが、小学生、中学生及び大学生を対象とした興味深い取り組みがされたことを評価したい。小学生13名、中学生7名の参加人数が少し少ないのが残念に思われる。今後は牟岐町に限らず、広く県南地域を対象とした事業への発展を期待したい。県内4大学の連携を図り、県内大学生の食生活の実態調査などが実施されると、一層興味深い結果となるであろう。 ・小学生に対するキャッシュレス決済セミナーについては、お金についての考えをしっかりさせる上で良いことだと思う。キャッシュレスは見えないため、どれだけ使ったか履歴を確認するなど注意しないと大人でも自己破産につながってしまう。また、リボ払いは便利な面もあるが、借金と同じ面もあることを子ども達には理解してもらいたいと思う。また、中学生や大学生の食を通しての地産地消の取り組みも、自身の食生活や地元の食材を見直す上で、良い動機づけになったと思う。できれば、徳島をPRするために、牟岐だけでなく、徳島の美味しいカレンダーと、レシピ本などを県内のJAなどと連携し、県の事業として行ってはどうかと思う。
2	にし阿波エシカル未来創造キャンパス	・傾斜地農耕システムで、実に多様な農作物が作られ、それが加工所で活用されている様子がよく分かった。また、ノウハウの情報共有が重要ということも理解できた。今後、地域農業の価値を洗い出し、地域に還元する方法や全国・世界に向けた情報発信の方法を見つけ出すことに期待したい。 ・地域の農業を「多様性」の観点から考察、高校生や地域住民にその良さを再発見してもらう取り組みが素晴らしい。これをどう守り、つなげていくかのアプローチは今後の課題か。 ・世界農業遺産に認定されたとはいえ「傾斜地農耕システム」の認知度は高くはないのが現状である。にし阿波地域の「エシカル」意識を高めることと併せて、広くPR活動を行っていくことが必要であろう。西阿波地域の農業を「多様性」と「レジリエンス」と位置づけ、先ずは地域の人々の関心を引きつけるような体験型イベントを実施するのも面白い。 ・地域農業の高齢化や後継者不足は、現在どこの地域でも直面している問題である。今回の調査及び藤の里工房の活動から見えた行政による動機づけ(設立の後押しや、コンニャクなどの奨励作物化)が地域を活性化したことなどが非常に興味深かった。しかしながら、世界農業遺産にも認定された「傾斜地農耕システム」については、地元の若者にもあまり認知されておらず、高校生から寄せられた意見も取り入れ、早急に対策を取るべき時が来ていると感じた。現在、コロナの影響で、修学旅行の開催地が都会から田舎へという流れも出てきている。また、コロナの影響で失業した人、第2の人生を田舎で過ごしたいと考えている人も増えている。コロナ後、山の購入者が増えたというニュースも目にしたが、ピンチをチャンスにつなげる今後の活動を期待したい。
3	市販アクセサリーの品質調査による安全対策の必要性の検討	・ピアス等に含有されたニッケルが深刻な金属アレルギーを引き起こすにもかかわらず、法的規制はおろか、業界の自主規制という消費者保護の手段が十分講じられていないことに危機感を覚えた。県庁内にある消費者庁「消費者行政新未来創造戦略本部」とも連携し、業界等への働きかけを行っていって欲しい。 ・ネットで安価で販売されているピアスの危険性などアクセサリーの安全対策の必要性がよく伝わってくる調査研究となっている。ただ、前回調査と比べ新しい切り口や発展性に欠ける。 ・金属アレルギーについては、未だ詳細に理解できている人の数は少ない。今回の調査研究の結果を多くの方法を用いて広報していくことが肝要である。徳島大学から全国に向けて情報を発信し、関係省庁との連携を図りながら、国民の健康維持への働きかけとなることを望む。セミナー回数が1回のみであったが、より多くの参加者に学習の機会を与えるために、複数回の開催を期待したいところである。 ・歯の治療に使用されている金属が原因で、体の他の部分において皮膚の炎症が起こることがあるということが、衝撃であった。そして、その金属アレルギー発症の要因として、ピアス等の装飾品に含有されたニッケルに高いリスクが疑われることから、流通しているピアスの分析が行われ、その結果から10年前よりもニッケル含有割合は下がっている可能性が示唆されたものの、法的規制のない現状においては、安心してピアスなどの装飾品を身につけることができないと感じた。今後、安心して装飾品を購入できるために本調査研究の目的である法的規制の確立につながることを大いに期待する。
4	衣料品ロス削減を目的とした消費者教育に関する研究	・マンツーマンで衣料品を仕分けし、不要分を廃棄しクローゼットをミニマムにすることで、むしろ必要な衣服がすぐに取り出せるようになり、効用が高まること、こうした状態を継続することにより、あまり使わない衣料品を購入しなくなり、結果として衣料品ロス削減と満足度向上が図られることが分かり、改めて身の回りをモノであふれさせないことの重要性が分かった。マンツーマンでは多数の人にこうした習慣を身につけてもらうことは難しく、だれでも適用できる手順書等があるとよいと思った。 ・衣料と環境問題を結び付けた視点はよく、フォローアップ調査の内容も興味深かった。ただ、片付けや断捨離とは違う視点が欲しかった。また「分かっているけどできない」というメンタル面にも迫って欲しかった。 ・衣料品ロス削減という新しい着目点についての調査・研究である。身近にある問題として、消費者教育の一分野としても興味・関心の高い研究であることを評価したい。ケーススタディ対象者が3名であり、その結果のみに基づいての考察は少々難しい面もあると考える。アンケート調査やセミナーの開催等を通して、より多くの消費者の実態を把握し、衣料品ロス削減をSDGsの一環として位置付けてもらいたい。 ・アパレル産業における衣料品ロス削減を目指すという点は共感できる。しかしながら、購入したものを単に処分するだけで終わってしまうのであれば、意義をなさず今回の対象者のように購入に関する意識を変えることを社会全体に拡げる手段も考えている必要があるのではないだろうか。例えば、YouTubeなどの動画配信も有効ではないかと思う。
5	食品表示法で義務付けられている一般的な加工食品への栄養成分表示を推進するための環境整備	・食品表示法での栄養成分表示の問題は昨年度調査研究に続くもの。小規模でないスーパーマーケットでは栄養成分表示を行っていない加工商品は販売できないことがアンケート対象店の全店で認知されており、前年度調査研究の効果があったものと考えられる。 ・3度目の研究で認知度は高まっており調査は詳細で有意義。ただ、前回調査と比べ工夫や発展性が感じられない。課題解決へのアプローチにも欠ける。 ・2019年よりスーパーを対象として細やかな調査が実施され、「栄養成分表示」についての大きな啓発となったことを評価する。徳島文理大学の担った役割と、その成果は大きく、消費者や事業者への情報発信や相談対応機関として高く位置付けたい。今後も開かれた高等機関として消費者の視点に立った活動を継続していってもらいたい。 ・栄養成分表示の義務化後の県内のスーパーの商品数及び売上高の変化及び食品製造業者への支援状況について具体的に調査が行われたことにより、県内のスーパーにおける実態の把握ができた点での意義は大きいと思う。考察の8)において、20%における業者が、栄養成分表示を実施しているかどうかを加工食品の仕入れの基準にしておらず、栄養成分表示を記載していない場合でも、17.3%のスーパーが販売していたとの回答がなされているが、調査票による回答で、このような状況であるなら、実地調査も行えば、もっと増える可能性もあるかと思われる。消費者が安心して加工食品を購入することができるための栄養成分表示であると思うが、制度が形骸化しては意味がないので、今後の行政の指導に期待する。
6	とくしま発！住まいのエシカル消費行動カード・ものさしの社会実装（認証ラベル化）事業	・社会、環境、地域の課題を解決する消費者行動の種類やコストをカードゲーム化して楽しみながら理解できるようにしたもので、社会実装を進めていく上で大きな意義がある。また、プレイヤーの年齢・職業・年収等の設定も適切に設定されており、実践的な内容となっている。工務店等で積極的に活用されるよう、引き続き一層の普及に努めることを期待する。 ・昨年の研究成果をきちんと分析しており、素晴らしい。新しい発想のカードゲームは面白く、工夫とアイデアがよい。一方、多少面倒で時間がかかるのが課題か。発想はよいので今後の普及に期待したい。 ・自分の家を持つことは多くの人にとっての夢であり、生涯において度々あることではない。そのためにも、自分の希望と納得のできる家を建てたいと願うのは当然であろう。この「SDGsいえづくりカードゲーム」を通して理想となる家づくりへの関心が高まり、未来を見据えた消費者が増えることを願う。ゲームに大切なファシリテーターの養成についても幅広い分野及び関係機関に呼び掛け、ゲーム実施が身近で楽しいものになるように努めてもらいたい。 ・今年度の研究では、より具体的にカードゲーム時間に必要な所要時間も示され、実際の運用に向けてまた1歩前進していることを感じた。例えば、紙のカードによるゲームをオンラインによりできるゲームとし、経費の積算もリアルタイムで、数社の工務店とできるようになれば良いのにと感じた。そして、納得した上で、工務店を選ぶことができれば、満足度も向上すると思う。また、その方が、家を改修したり、建築する際のツールとして気軽に利用できそうに思う。最後に、「今後の展開」に書かれていたことが実現していくことを期待したいと思う。